

イ 御用米曲輪平場の整備案について

1. 平成 30 年度の基本設計について

・近世の基本設計は策定済みであり、戦国期範囲は方向性のみが決定している状況である。具体的な内容は以下の通りである。

【完了済みの整備内容】

- ・北西土塁ゾーン
- ・北東土塁ゾーン
- ・瓦積み堀

【未完了の整備内容】

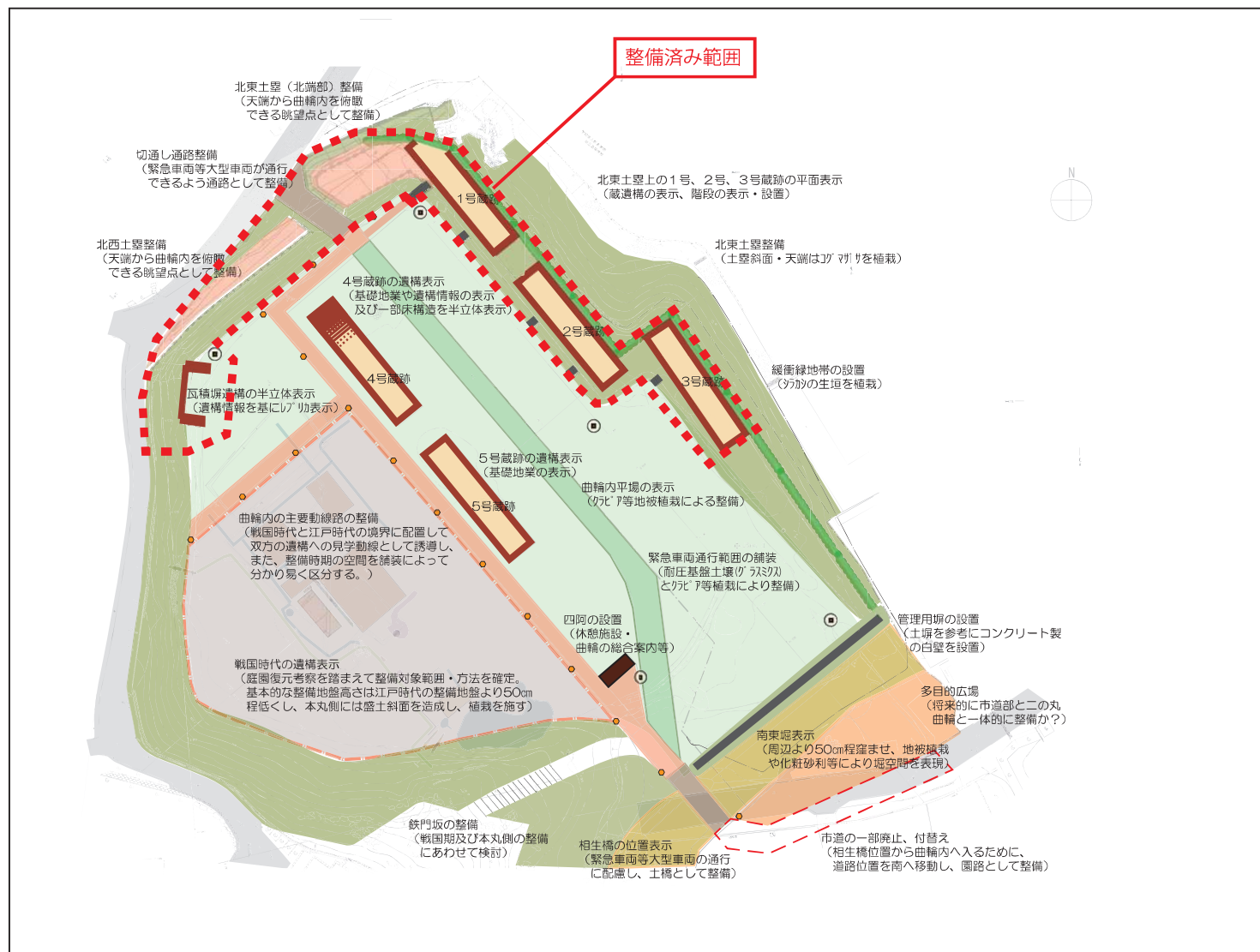
- ①4号蔵跡の遺構表示
- ②5号蔵跡の遺構表示
- ③四阿（休憩施設・曲輪の総合案内等）の設置
- ④管理用堀の設置（土堀を参考にコンクリート製の白壁を設置）
- ⑤南東堀の表示
- ⑥鉄門坂の整備
- ⑦相生橋の表示
- ⑧多目的広場の整備

2. 残る課題

・当初戦国期での整備が予定されていた南側範囲に加え、新たに明らかとなった北側の範囲を含めた**平場全体を戦国期の時代設定で整備する。**

・整備案としては、令和6年度第3回部会において「**遺構が確認されている範囲と連続性が想定できる範囲での整備案**」で進めることとなった。この手法によって、調査成果の中で連続性が想定できる範囲を復元的に整備することにより、遺構のみの表現と比較して**当時の空間を分かりやすく表現**できる。課題としては、想定した範囲の根拠や判断基準の設定、説明に検討を要すること、**不明な箇所が空間として中途半端に残ってしまうことが挙げられる。**

■平成 30 年度基本設計時の全体計画図



令和 6 年度第 3 回部会にて決定した平場南側の整備案

「遺構が確認されている範囲と連続性が想定できる範囲での整備案」

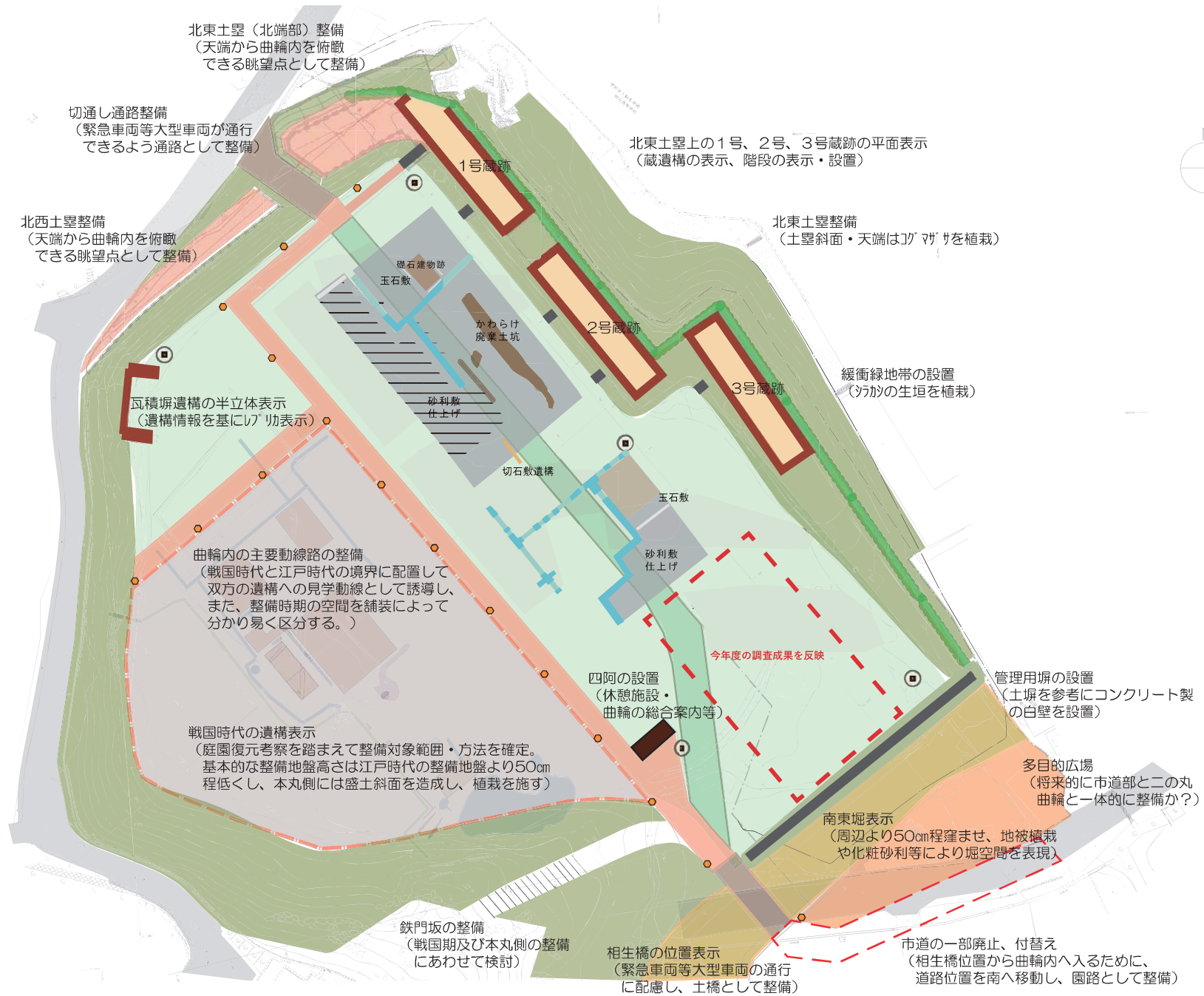
【メリット】

- ・調査成果の中で連続性が想定できる範囲を復元的に整備することにより、遺構のみの表現と比較して当時の空間を分かりやすく表現することができる。

【デメリット】

- ・想定した範囲の根拠や判断基準の設定、説明に検討を要する。
- ・不明な箇所が中途半端に残る。





■整備方針について（不明な範囲をどのように扱うか。）

案 1：戦国期整備面の地形を下げて表現する。

【手法】

- ・敷地全体を下げ、一体的に表現する。

■メリット

- ・敷地全体が戦国期のレイヤーで統一されることから、来訪者の理解がしやすい。
- ・不明な範囲も含めて同一平面で整備することから、空間としての規模（広さや見通し）が伝わる。
- ・園路については、戦国期整備面と同じ高さまで下げた園路を通すことも可能。

■デメリット

- ・不明な範囲も含めて同一平面で整備することから、分からない範囲があいまいな空間となる。
- ・周囲を整備済みの地盤高から掘り下げることになるため、アプローチに階段やスロープが必要となる。



案2：平場のうち、遺構の状況が分からない範囲は下げずに表現する。

案2—A：分からない範囲を園路として整備する。

【手法】

- ・不明な範囲を戦国期整備範囲とは切り分け、来訪者のための園路として整備する。
- ・遺構表示とは異なる園路や植栽溜まりを設け、来訪者のための緑陰やベンチ等を配置することもある。

■メリット

- ・攪乱範囲での設置を想定しているため、遺構への影響が少ない。
- ・園路に沿って緑陰やベンチ・解説板等を作り、来園者の滞留機会・時間を延ばすことができる。

■デメリット

- ・デザインによっては当時植栽溜まりがあったと誤解される可能性がある。
- その他
- ・植栽溜まりを蔵跡の範囲に合わせて花壇とし、蔵跡の表示と兼ねることもできる。
- ・パーゴラ等による日陰の確保も考えられるが、空間に対しての影響が大きい。

【蔵跡の表現検討】

Ⅰ案：蔵の範囲を平面表示する。

■メリット：

- ・来訪者全員が、現地で視覚的に蔵跡の位置が確認できる。
- ・蔵跡の物理的な規模間を最も実感しやすい。

■デメリット：

- ・整備手法費用がかかる。
- ・戦国期遺構と誤解しないための解説が必要。

Ⅱ案：蔵の範囲をARで表示する。

■メリット：

- ・遺構への影響がない。
- ・平面表示では伝わらない高さ等、表現できる情報量が多い。

■デメリット：

- ・スマートフォンを所持していない層が体験できず、解説機会の不平等が生じる。
- ・システム維持・更新コストがかかる。



北東土塁側からアクセスできる園路を設置。曲輪全体を俯瞰して見学する。全体が分かる模型等を設置する。

案2：平場のうち、遺構の状況が分からない範囲は下げずに表現する。

案2-B：分からない範囲を舗装広場として整備する。

【手法】

- ・不明な範囲をフラットな多目的広場とする。
- ・広場とする範囲に近世蔵跡の表示を行うことができる。▶【蔵跡の表現検討】

■メリット

- ・イベント等の活用スペースとして使うことができる。
- ・広場としての「舗装の下には戦国期の中心建物があったかもしれない」という余白を、解説板などを通じて来園者の想像力に委ねることも可能。
- ・近世蔵跡の平面表示を行うこともできる。

■デメリット

- ・緑陰を設けることも可能だが、一段下げた戦国期整備面に配置することになるため、遺構との取り合いの検討が必要となる。
- ・戦国期の整備範囲で複数の舗装を用いて空間表現することから、デザインとして煩雑になるか。

【蔵跡の表現検討】

I 案：蔵の範囲を平面表示する。

■メリット：

- ・来訪者全員が、現地で視覚的に蔵跡の位置が確認できる。
- ・蔵跡の物理的な規模間を最も実感しやすい。

■デメリット：

- ・整備手法費用がかかる。
- ・戦国期遺構と誤解しないための解説が必要。

II 案：蔵の範囲を AR で表示する。

■メリット：

- ・遺構への影響がない。
- ・平面表示では伝わらない高さ等、表現できる情報量が多い。

■デメリット：

- ・スマートフォンを所持していない層が体験できず、解説機会の不平等が生じる。
- ・システム維持・更新コストがかかる。

